

金子大榮集上
目次

如来の救済	007
念仏往生の願	014
西方浄土	023
聞　　思	029
信心歡喜	037
大　　行	045
眞実証	055
眞実と方便	068
讚仏のころろ——『讚阿弥陀仏偈和讚』について——	079
自然法爾	090

真宗の人間観——『真宗の要旨』によりて——	108
五念門について	148
悪人正機の教	166
浄土と教団	187
教化——原理と方法——	203
化身土巻の意義	234
浄土の菩提心	245
往相回向の問題点	256
あとがき	279

凡例

- 一、本書は、真宗大谷派宗務所出版部より一九七八（昭和五十三）年に発行された『金子大榮集上』を底本とした、改訂版である。
- 一、漢字は原則として通行の字体に改め、読みやすさを考慮して、漢字をひらがなに、またひらがなを漢字にするなどした。
- 一、引用文は、底本引用文を尊重しつつ、旧漢字・旧仮名遣いは通行の字体・仮名遣いに改め、適宜書名を付した。
- 一、底本中、今日の人権意識に照らして問題と考えられる表現については、適宜改めた。

金子大榮集
上

如来の救済

一

「真実というは即ちすなわこれ如来なり。如来は即ちこれ真実なり」（『教行信証』「信卷」引用『涅槃経』）と教えられた。それは「如じよより来生して、法の如じよ々をさと」（『大無量寿経』）るといふ経説と思ひあわさるべきものである。如々は真理であり、それよりあらわれてくるものは智慧であり慈悲である。これによりて「弥陀如来は如じよより来生して報ほう応おう化け種しゆ々の身をじげん示現したまう」（『教行信証』「証卷」）と領解りやうげせられた。

されば如来そく即阿弥陀である。それゆえに、如来の救済というも畢竟ひつぎやうこれ阿弥陀の救済である。それはすなわち光明寿命せうめいの摂化せつけということである。その「光明は智慧のかたち」（『唯信鈔文意』）といわれ、あるいは「智慧はひかりのかたち」（『二念多念文意』、『正信偈大意』）といわれる。いづれにもせよ「光明は智慧」であり、阿弥陀仏は無碍むげ光こう如来である。されば如来の救済とは、無碍むげの光をもつて「有量うりやうの諸相」（『浄土和讃』）を照らし、その「真実明」（同）となるものであら

ねばならぬ。「有量の諸相」とはすなわちすべてにおいて有限なるわれらの身である。それを照らして有限者の頼りなきを知り、その帰依する所となる、これすなわち光明の摂化である。

思うに真実の智慧は、よく対者を了解するものである。そのためには対者になりきって、しかも対者を包摂するものでなくてはならぬであろう。それゆえに如来の救済とは、すなわち衆生の現実に大悲しつつ、それを真実智慧に摂取せらるるものである。この意味において智慧も慈悲も別なものではない。慈とは「視ること自己のごとく」（『大無量寿経』）衆生を包摂するものであり、悲とは衆生の身となりて感ぜらるる智慧である。されば「仏心」というは大慈悲これなり。無縁の慈を以て諸の衆生を摂す」（『観無量寿経』）というも、智慧の光明による摂化のほかないであろう。「無縁の慈」とは、如々の理に相応するものであるからである。

しかし、すでに光明と寿命とを分かちて、光明を智慧とせる上は、寿命こそとくに慈悲の意味をあらわすものでなくてはならぬであろう。寿命ということにおいて感知さるることは、同化ということである。生命あるものは、その受容しうるものを同化する。されば如来の慈悲とは、衆生を摂取してその御心と同じものにせらるることであろう。衆生に同心しつつ、かえって衆生を如来に同心せしめらるる。それが大悲の摂化である。この意味において光明は如来の外用であり、寿命は如来の内徳であるともいふべきであろうか。

されどまたひるがえって思うに、寿命とは永遠に今なるものである。「命」は今にあり「寿」

は永遠を意味する。されば寿命こそは、かえって光明の徳を常に今にあらしむるものというべきであろう。ともあれ、その光明寿命の徳によりて、如来の救済は行わるるのである。これすなわち救済とは如来の慈悲・智慧を受用することであることをあらわすものである。

二

ここにあらためて救済の意義を思う。救済の本義は苦悩の除かるることである。されば如来の救済というも苦悩を除くものにはかならずである。「諸仏の大悲は苦あるものに於てす」〔観経疏〕「玄義分」と説かれ、念仏も「苦悩を除く法」〔観無量寿経〕として教えられた。ここをもつて「教行信証」においても、「権化の仁、ひとしく苦悩の群萌を救済」〔総序〕したもうことをたたえ、本願の三心も、一貫するところは「一切苦悩の衆生海を悲憫」〔信卷〕したもうにあることを顕彰せられた。

さればその苦悩とはいかなるものであろうか。われらは生活の途上において、しばしば障礙にあり、そこに苦悩を感じる。したがってその障碍さえ除かるれば苦悩は解除されるのである。人間の知識はそのために全力を注いでいるのである。しかしその方法で人間の苦悩は全面的に解除されるということはない。人間世界のあり方はそうなつてはおらぬようである。さらにかえりみれば苦悩を感じることは、人間の性根と業縁とによることが多い。しかしてその

業縁も性根も根本からあらためるといふことは不可能である。その限り人間は悩まねばならぬようにできているのである。この意味において苦惱は人間のあり方であるといわねばならぬ。人間とは苦惱の衆生をいうのである。

それゆえに、この人間苦は人間自身の方では救われぬ。これすなわち如来の光明にあらずば人間の救われざるゆえんである。しかし、その場合に苦惱の解除といふことはどうなるのであろうか。

人間の苦惱は人間がそのあり方に無知であることから生ずるのである。それ自体は有限者であるにもかかわらず限りなく何ものかを追求している。その欲望が満たさるる道理はない。人間の苦惱はこれによりて絶ゆることがないのである。それはあくまでも生きようと欲しつつ死をまぬがれない苦惱ともいうをえるであらう。これによりて「生死の苦海」(『高僧和讃』、『歎異抄』)と教えられた。人間の頼りなさ、人間の淋しさ、すべてこれ生死の苦である。されば人間苦を救う如来の光明は、正しくわれらが生死の帰依となりたもうものでなくてはならぬ。その生死の帰依所はすなわち涅槃界である。涅槃界とはすなわち如々の境地である。それゆえに「如来すなわち涅槃なり」(『浄土和讃』)と教えられた。その涅槃とは寂滅を意味するがゆえに、畢竟これ一切の限度の解除されたる境地にほかならぬであらう。これすなわち如来の救済によりて有限者の苦惱が解除せらるるところである。衆生はその涅槃に帰依してその所を

えるのである。かくして如来の救済とは、大いなる解脱あつたを与あたうるもの、生死の帰依となるもの、衆生をして各々その所をえしむものであるということが思い知らさるのである。

しかるに、これらの救済の意義を成就するものこそは、本願の浄土にほかならない。本願とは大悲心の表現であり、光明の行現である。それゆえに如来の慈悲というも智慧というも、その本願において聞思もんしすべきであらう。その本願は衆生をして念仏往生せしめようということである。さればその往生すべき浄土とは、生死の帰依となる涅槃界であり、その帰依の所をえることにおいて、われらは大いなる解脱を恵まるものでなくてはならぬであらう。これすなわち念仏によりて如来の光を受け、往生によりて浄土の涅槃が感ぜらるるということである。まことに、ここにこそ如来の救済といわるべきものがあるのである。

三

ここに知らるることは、如来の救済は現前の苦悩たひじを対治するものではないということである。如来の救済は病気がなると、貧乏することはない、というようなものではない。それらの救済は人間の知識によるべきものである。如来の救済は真実の智慧によりて行わるる。それは病を縁として病を超える道を求め、貧しさを機として真実なる心の富を知らしむるものである。これすなわち転悪てんあく成善じょうぜんの法である。智慧とは転悪成善ということである。不幸を転じて幸福と

するもの、これすなわち如来の救済である。これによりて人生は無駄のないものとなり、有限界裡かぎりに無限の光明を受用して、涅槃に帰するものとなるのである。

この救済の実際を、「念仏衆生撰取不捨せんぶしゆふしよ（念仏の衆生を撰取して捨てたまわず）」（『観無量寿経』）という。念仏とは智慧の行である。それは「転悪成徳正智（悪を転じて徳を成す正智）」（『教行信証「総序」』）といわれ、「智慧の念仏」（『正像末和讃』）と教えられた。されば念仏するとは人生における真実の智慧をえることである。その智慧は如来の光明より来る。それゆえに念仏衆生撰取不捨という。撰取不捨とは如来の光明の妙用みょうゆうである。そして撰取とは撰受し同化することにはかならない。されば念仏衆生撰取不捨とは、衆生は念仏することによりて光明の智慧に同化せらるるということであろう。それゆえに如来の光明・寿命の撰化というは、すなわち人間生活の転悪成善せらるることである。したがってそれはまた人間生活はすべて念仏の智慧に撰化せらるるというをえるであろう。これによりてわれらの生活は十分にその意義を満たさるのである。人間にとりて、これ以上の救いはある道理はないのである。

それゆえに如来の救済は、現世利益げんぜりやくを要とするものではない。世はいかに動くも動かすも、人間の不安は去らぬという根柢こんていに立つものであるからである。いかに動かされいかに動くも人間は救われない。その人間を救うものが如来の救済である。それゆえに如来の救済ありても、人間はそのあり方において変わることはないであろう。その動き動かされつつある生活の上に

無限の智慧を受用しつつ行くのである。したがって転成ということも智慧によるのであつて事象にあるのではない。病は病のままにして心の富をえるということは、凡夫の悲しみにおいて智慧の喜びを感じしめらるることである。その智慧はまた凡夫の快樂をかえりみて如来の大悲を思わしむるものともなるであらう。すべては有限者の無限者に帰依する感情であり、如来の光明を凡夫の生活に受用する心境である。

しかし如来の救済は、動き動かさるる人生に何らの影響もないことはないであらう。心に満足あるものは行においても余裕があることである。したがって動き動かさるるにもおのずからなるさわりなき道が見出さるることであらう。業縁のままに動かさるるとしても、無限の光を仰ぐものにとりては、そのままの上に自由を感じしめらるる。その内部の救いはやがて身の命を養ふことともなり、喜びの心をもつて精進することともなるであらう。それは人をして健康ならしめ、よき環境を作ることともなるに違いない。その意味においては、かえつて如来の救済においてこそ「この世の利益きわもなし」（『浄土和讃』）ということになるのである。

されどその利益は利益のためにとてなされたものではない。したがつてその利益は利益という相においてとらえらるべきものではないであらう。それを有作・有相としてとらえようとせば、かえつて眞実なる如来の救済を忘るるものとなるのである。

（昭和二十八年八月『教化研究』創刊号 特集 如来について）

念仏往生の願

—

われらの救済は如来の本願力によりて行わるる。その本願を念仏往生の願という。それゆえにわれらの救わるるということは、如来の願力によりて念仏往生せしめらるることのほかないのである。

その「われら」は本願において「十方の衆生」とよばれてある。「十方衆生」というのは、十方のよろずの衆生なり、即ちわれらなり」（『尊号真像銘文』）と領解せられた。されば衆生とは生あるもの衆べてであり、その生は三有虚妄の生であるが、必ずわれらであつてかれらではない。ここに如来の本願は煩惱具足のわれらがためということを知らねばならぬ。

仏は覚者であり、われらは迷える者である。迷える者は覚れる者知らざれども、覚者は迷える者を知りたもう。その迷える者を大悲して救おうと願わるるのである。その大悲においてわれらは如来の他己として見出されたのである。「視ること自己のごとく」（『大無量寿経』）と

説かるる。仏にとりては己は自にのみにあるのではない。他の衆生においても己が感ぜられる。畢竟ひっきようこれ自他を分かつたざる御心である。その仏心においては、われらは汝らである。汝らはすなわち他己である。大悲心中にあるわれらである。

これによりて思うに「設たとい我われ仏ぶつを得たらんに」(『大無量寿経』)と願わること、決して単に希望きぼうというようなものではない。その願にはすでに衆生を救わずばわれも「正しょう覚がくを取らじ」(同)という誓いは予想よそされているのである。それゆえにその誓いも単なる決意ではない。衆生と浮沈を約束やくそくされたる願力である。されば誓願ちがんの意義も、念往生の願においてとくに明確なるものといわねばならぬ。

二

しからばわれらの救われるということはいかなることであろうか。それは「心を至し信樂しんぎやうして我が国に生まれんと欲おもうて乃至ないしじゅうねん十念じゅうねんせん」(『大無量寿経』)と願われてあるものである。ここにまず心をひかることは「我が国に生まれんと欲おもえ」ということである。迷える衆生を救う道は覚さとりの世界へと生まれしむるほかはない。業苦を離れぬわれらにとりても、浄土に生まるることこそ真実の願となるものであらねばならぬ。ここに往生浄土の道は開かれたのである。

ここで欲生よくじやうということが問題となる。生とは死に対する言葉である限り、生を欲するといふことは迷妄といわねばならぬ。されば本願に欲生といふのは、凡人の謂いわうような生ではないであろう。また浄土は生死しじゆうじを超えたる世界である。それゆえにそこは無生無死むじやうむじの境といわねばならぬ。その無生の国に欲生するとはいかなることであろうか。

曇鸞大師どんらんは、往生とは「得生者とくじやうのひとの情こころ」（『浄土論註』）であると説かれた。その「情」とはおそらく凡情ということでないであろう。樂をえたいために往生せんと欲うものは得生せぬといわれてあるからである。されば「得生者の情」とは、浄土に対しての思慕の心ともいふべきものであろうか。無生の国といっても、われらにとりては彼岸の世界である。その限り思慕の情こころにおいての欲生心なきをえない。されば安樂の名を聞きて往生するといふも、深く現世の業ごう苦くを慚愧ざんきし悲痛する心において成立することではないであろうか。安樂浄土の名が仏事をなすとは、このことをあらわさるもののごとくである。

しかし本願の欲生は得生者の情であるよりも、むしろ如来の大悲心といふべきである。その大悲心もし情といわるるならば、欲生とは如来の至情である。まことに如来の大悲は衆生をして「我が国くにに生まれんと欲え」ということに全現せられてある。「欲生よくじやうと云うは、則すなわち是これ如来諸有しようの群生ぐんじやうを招喚しやうわんしたまうの勅命ちやくめいなり」（『教行信証』「信巻」）、そのことは本願の御言みことを聞くものにとりてきわめて明瞭のことといわねばならぬ。さればこそ往生は得生者の情であ

るといふことも成立するのであろう。それは本願の御言を聞くものの情であるといふことである。

これによりて「心を至し信樂して」といふことも、われらに對しての大悲の願心のほかなきことが領受せらるる。とくにわれらを他已として「心を至して」と願わることとは、これすなわち自己の眞實を衆生において移さるるものであらねばならぬ。されば「心を至し信樂して我が國に生まれんと欲え」といふ御言を聞くわれらは、ただその大悲の願心を信樂するよりほかないことであらう。ここに、

至心は眞實ともうすなり。眞實ともうすは如来の御ちかひの眞實なるを至心ともうすなり。煩惱具足の衆生はもとより眞實の心なし、清淨の心なし、濁惡邪見のゆえなり。信樂といふは如来の本願眞實にましますを、一心なく深く信じて疑わざれば信樂と申すなり。この至心信樂は、すなわち十方の衆生をして、わが眞實なる誓願を信樂すべしと勧めたまえる御ちかひの至心信樂なり、凡夫自力のころにはあらず。欲生我國といふは、他力の至心信樂をもて安樂淨土に生まれんと思えとなり。

〔尊号眞像銘文〕

とある宗祖の領解を思う。その旨趣のありがたさ、尽くしえぬことである。

しかるに本願には、さらに「乃至十念」の御言がある。その「乃至十念」は十声称念であり、称名念仏であると伝承され領解された。これによりて本願の御言を聞くに、「心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて」という願心も、すべては「わが名を称えよ」ということに全現せられてあることが感ぜられる。したがって称名念仏こそは本願を信樂する身に行わるる往生の法であらねばならぬ。されば本願の勅命を聞くということは、ただ心に大悲の御心を感じるにとどまるものではない。御言のままに身に行わしめらるることである。大悲の本願は心に徹して信樂となり、身に行われて念仏となる。行信不離にして身心一如である。

されば念仏の行ぜらるることは、本願を信樂する心によることではあるが、その信樂の心はまた念仏する身を離れたるものではない。ここをもつて、

弥陀の尊号となえつつ

信樂まことにうるひとは

憶念の心つねにして

仏ぶつ恩報おんぽうするおもいあり

と讃仰せられた。

（『正像末和讃』）

かくして称名念仏は衆生往生の行となるのである。まことに「念仏より外ほかに往生のみち」〔歎異抄〕はない。さればこそ「本願を信樂する」〔親鸞聖人血脈文集〕を要とするのである。

四

しかし念仏はどうしてわれらを往生せしむる力があるのであろうか。それは如来の本願においてとくに「若し生まれずば、正覚を取らじ」〔大無量寿経〕と誓われてあるからである。その誓いこそは力の根源となるものである。經に説きたもう兆ちようざい載永劫ちようごうの修行ということは、この誓願によることであろう。この誓願の力が名号の上に成就されてあるから、われらその名号を体して往生の身とならしめらるるのである。それゆえに誓願不思議と名号不思議とはただ一つなりと教えられた。

縦令じゆりやういっしやうぞうあく一生造悪いっしやうぞうあくの

衆生引接いんじやうのためにとて

称我名字しやうがみょうじと願じつつ

若不生者にやくふしやうじやとちかいたり

〔高僧和讃〕

されば仏が、仏となりたもう道は、われらの念仏往生にありと定められたのである。その誓願力によりて念仏は往生の行となるのである。

しからばその念仏はいかなる形において往生の行となるであろうか。そのことはすでに先の「如来の救済」において領解せることである。念仏において転悪成徳の智慧であることは、光明において撰取不捨の利益である。されば念仏の衆生において撰取不捨を行じたもう、そこに如来の誓願力もいよいよ信樂せらるることであろう。それは有限者に内感せらるる無限の力である。念仏する身は無限の力を恵まるる。それゆえに業苦の世にも生の喜びをえることであろう。しかしてそれはすなわち不死の徳を与えられることである。

これによりて往生の生は、凡夫の謂うがごとき死と相對するものでないことは、とくに明らかとなった。「若し生れずば」とある「生」は仏の正覚と約束されし「生」である。仏の「我が国」と呼ばれる境地への「生」である。さればその国は永遠真實の世界であり、寂靜無為の淨土であらねばならぬ。したがってその淨土へと生まれしめらるるということは、それによりて、われらの人生も意味をもつということとなるであろう。これすなわち淨土の光は、この世を照らすこととなるからである。

五

その仏の本願は清淨真實であり、その仏の淨土は廣大無辺である。されど、それゆえに、「唯五逆と誹謗正法を除く」（『大無量壽經』）と宣言せられざるをえなかつたのであろう。私は「さ

れど」という。それは本願には一人も除かるべきものがあるはずがないと思うからである。「十方衆生」には一人も漏らさるるものはない。さればこそこの身も救わるるのである。われらの救わるる法でなくてはわれの救わるる道理はない。そのわれらとして、五逆の謗法も内感さるることではないであろうか。ここに私は「されど逆謗は除かれたり」の悲しみを感ぜざるをえぬのである。

しかし「されど」の下から「それゆえに」と思い知らねばならぬものがあるようである。それは五逆と謗法とは寂靜無為の世界を濁乱せしめ、清淨真実の仏心に反逆するものであるからである。されば如来の本願とは、畢竟これ逆謗あらせじとの大悲心なりともいうをさうである。したがってその本願に逆謗の除かることは必然のことといわねばならぬ。

ここにおいて、「されど」の悲しみは私のものではなく、如来のものであることが感ぜられるようである。まことに逆謗を除くところに如来の大悲があるのである。しかもそれは如来の大悲なるがゆえに、その懺悔をまち、その回心をまちて摂取したもうことが思い知らる。これによりて宗祖は「唯除はただのぞくということばなり。五逆の罪人をきらい謗法のおもきとがをしらせんとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしと知らせんとなり」(『尊号真像銘文』)と領解したまいました。

われ仏とならば、生あるものみな、心を至し信樂してわが国に生れようと欲い、わが名を称えよ。その人もし生れなければ、われも仏とはなるまい。ただ逆悪を造り、正しき法を誇るものを除く。

(金子大榮『口語訳・教行信証』)

(昭和二十八年十月 『教化研究』 第二号 特集 本願について)

西方浄土

—

日没に人生の帰趣を偲う、それが西方浄土の教えである。ここをもつて「西方寂靜無為の樂」(『觀經疏』「定善義」)とうたわれた。浄土とは差別動乱を超越せる一如無為の境地である。われらの父祖は夕日を拝しつつその無為涅槃界を感じた。日も月も西へと入る。そこに寂靜無為の一境が思慕せられた。

さればわれらをして往生せしめようとせらるる如来の浄土は「現に西方に」(『大無量寿經』)ありて、しかも「究竟して虚空の如く、廣大にして辺際な」(『浄土論』)きものである。もし此土すなわち浄土といわば、たとえ識見の高さがあっても、結局は浄土をせばめることとなるであろう。かえつて涅槃の一境を見失うからである。したがって「十萬億の仏土を過ぎて」(『阿彌陀經』)というも、「ここを去ること遠から」(『觀無量寿經』)ざるものである。近きは遠く遠きは近い。それは念佛者の身証するところである。

ここをもつて経には浄土を願生するものは、まず日没を見よと教えられた。善導大師の解釈によれば日没の所は浄土の方処である。しかしてまた日没の時は終日の業障を懺悔せしめ日没の光は万人の心を和むるものあるを感じしむる。さればそこは人生の帰趣を知らしめ、懐かしき「家郷」〔「教行信証」「行巻」〕を偲わしむるものである。それゆえに十萬億刹の彼方というも畢竟これ此土と浄土との境を指示するものである。人生の終極は浄土に帰入することであることを教うるものである。すべてこれらの旨趣は自然と親しみつつ生活し来たれるわれらの父祖にとりては、きわめて素直に感知せられしことであつた。

二

しかし現代の知識ではもはや西方浄土の説は支持すべからざるものとなつたようである。もちろん古昔といえども西方浄土を否定するものがなかつたのではない。禪家の本来無東西（本来東西なし）というがごときは、その代表的なものである。されどそれはとくに西方を願生する理由はないという實際上の非難であつた。それゆえに指方立相の説でなくば凡夫は救われないうという領解も行われたのである。しかるに現代の知識においては、はじめから西方浄土というようなことは考えられないというのである。それはいうまでもなく西方浄土の実体的存在を否認するものである。その限りその否認は経説にかかわりのないものというをうるであらう。

されど現代の知識人では、経説の西方浄土も実体的存在と解釈するを至当として、それを否認せんとするのである。

私は今ここで、西方浄土の否認に対して、いかに自分が思想してきたかを回顧しよう。それが私にこの題目を課せられた趣意に応ずることになるかも知れない。問題はまず地球説の上に立つて西方浄土ということは考えられるかということである。西へ西へと行けば、東へ出てくる。それが地上の東西である。その地球を離れて宇宙に東西はない。こういう問題は私の青年時代の教家を悩ませるものであった。

私は今も中学生時代にある先生から、この問題について討論せしめられしことを忘れない。まことに距世の感である。そののち、西田博士の純粹経験の説が私たちの心をとらえた。地が動くということは科学的知識の反省である。天が動くということは直接なる純粹経験である。その限り日没を西方とすることは誤りではない。

しかし何故に浄土を西方とせねばならぬのであるか。それは「対象の気分的性格」によるのである。本来無東西といつても、東は東であり西は西である。保養には南向がよく読書には北窓がよい。春は陽気にして秋は寂しい。自然と人間とを厳別しようということは、それ自体が無理であろう。われらの現実なる生活は自然と人間との順応しているところにあるのである。その現実を否定して無東西ということがごときはかえって抽象的ではないであろうか。されば西方

に浄土ありとは、念仏者の直接なる身証であつて、そこには何らの否認せらるべき理由はないのである。そう私は解釈してきた。

しかるに今日の学者の説によれば西方極樂の説は仏教本来のものでないということである。それは仏滅何世紀かの後に輸入せられたる外来思想であるということである。私はあえてその説を拒否しようとは思わない。仏教もその展開の途上において幾多の思想を撰取せんしゆせることであろう。それを外来思想として拒否すれば、仏教の撰化せんけを認めないこととなる。さればたとえ外来思想と見えても、それが仏教に撰取されたる限り、それは仏教として領解されねばならぬ。それを徹底的にいえば、外道の極樂と仏教の極樂とはまったく別なものである。今日の知識人の非難は、外道の極樂に対するものであつて仏教の極樂に関するものではない。何故ならば仏教は浄土を説くことにおいて眞実に一切衆生の救わるる道を明らかにしえたからである。

三

かくして私は西方浄土の否認は、実體觀の知識によるもので仏教的の智慧にかかわりのないものであると思うものである。しかしその実體觀は浄土教徒のものにもあることは否定することはできぬ。それは浄土の教えはとくに凡愚のものであるからにもよることであらう。凡愚にありては智慧と知識とは區別せられず、象徴と実體とは同視せられているからである。この

実際の事実に対してわれらはいかに考うべきであろうか。

第一に思われることは、知識的な批判は素直に受容せねばならぬということである。知識がもし宗教に役立つとすれば、それは信仰の名における頑迷性を破壊することであろう。われらは信心の堅固けんこであることとその頑迷であることとを區別し反省せねばならぬ。そうすれば知識はその頑迷さを破りてもその堅固をどうするものでもないことを知るであろう。あるいはその信心の堅固さも失われるといわれるかも知れない。しかし信心はそれによりていつそう柔軟となるであろう。その柔軟性こそは、眞実に金剛堅固こんごうけんこといわれたものではないであろうか。これによりて第二に思われることは、あらためて浄土の教説を聞思せねばならぬということである。浄土の教説が受容されなかったのは、その実体観にとらえられていたからである。そのために甚深微妙じんじんみひょうの教法が人生にかかわりのない奇異のものとも思われたのであろう。畢竟これ如来の教説を凡夫の知識をもって了解しようとしたからである。その凡夫の知識を離れ、虚心こしんに教法を聞思せば、いまさらに未知の広大な世界ありしことに驚喜せざるをえぬであろう。

浄土の教は現世を照らすに未来の光をもってし、動乱に悩む人間に「西ゆく道」を示すことであつた。されば「十万億の仏土を過ぎて」ということも、人間の一生を「無窮むきゆうの相」〔浄土論註〕において説かれしものと領解すべきであろう。地上百年の念仏生活を無窮の道として

説かれたのである。短き人間の一生において悠久無限の法界を遊履する、それが念仏の生活である。それゆえに「從^{じゅう}是^{ぜい}西方^{さいほう}（これより西方に）」（『阿弥陀經』）とはただ、この土の釈迦の説のみではない。十方の仏国いずれにありても「從^{じゅう}是^{ぜい}西方^{さいほう}」と説かるるのである。これすなわち仏教は「西ゆく道」なりということである。一如無為なる涅槃界を願うものであるということである。

それゆえにわれらはもはや、彼の西に向いて後を見せなかつた愚直さに追隨することはできぬとしても、夕日を拝しつつ一日の生活を反省せる父祖の精神を懐かしまざるをえない。かかる形で人生の帰趣をその日その日に思い知らしめらるるということはまことにありがたいことといわねばならぬ。「自然^{じねん}の浄土」（『浄土和讃』、『高僧和讃』）に郷里を見失える現代の知識はたしていずこへ行くのであろうか。私はいまさらに、

西路^{さいろ}を指授^{しじゅ}せしかども

自障^{じしょう}障^{しょう}他^たせしほどに

曠劫^{こうこつ}已^い来^{らい}もいたずらに

むなしくこそはすぎにけれ

（『高僧和讃』）

の和讃を称して、何か身にしむものあるを覚えざるをえぬものである。

（昭和二十八年十二月 『教化研究』 第三号 特集 浄土について）